

「連環記」其ノ一（幸田露伴）

平安中期の文人學者慶滋保胤は、その秀でた詩文の才を世人から高く評價されたが、自らは「出世間の靜寂の思」に強く惹かれ、「儒道の仁、佛教の慈といふこと」を「素直に受入れ」る心優しい男であつた。こんな話が傳はつてゐる。或時、保胤が往來繁き都の大路の辻に行んでゐると、重たげな荷を負ふて喘ぎつつ大車の軛に繋がれ涎を垂れ脚を踏張つて行く牛がゐた。牛は力の限りに歩んでゐる。が、牛使ひはそれでも足りぬとて笞打つてゐる。それを見て、「あゝ、疲れたる牛」、「汝今抑々何の罪ありて其苦を受くるや、と觀ずる途端に」また笞の音が響き、保胤ははらはらと涙を流して、「南無、救はせたまへ、諸佛、南無佛」と念じたといふが、かういふ事は一再ならずあつたといふ。

五十路を過ぎて、保胤は「塵芥を超脱した清淨三昧」の明暮の中、「日本往生極樂記」を著して、本朝四十人餘の善男善女の「往生事實の良驗を録」するが、その翌年、落髮出家の身となり、寂心と名乗つた。

その頃、彼の縁者に増賀上人といふ高僧がゐた。天台宗の聖典たる摩訶止觀に深いと知られてゐたので、寂心は増賀について止觀の奧儀を學ぼうとするが、増賀は「眞の學僧氣質で、俗氣は微塵ほど

も無く、深く名利を憎んで、斷岸絶壁の如くに身の取り置きをした」爲、時に「懼りもなく馬鹿げた事をして、他に厭ひ忌まれても、自分の心に濟むやうに」振舞ひ、尊貴の人々をして「身戦き色失ひ、慙汗憤涙、身をおくとく無からしめ」る事さへ稀ではないといふ實に「狂氣じみた」僧であつた。

「この斷岸絶壁のやうな智識に、清淺の流れ靜かにして水は玉の如き寂心が摩訶止觀を學び承けようとした」譯だが、増賀の止觀の講説を聴くと、寂心は感激し隨喜して、堪り兼ねて啜り泣いた。すると増賀は座を降りて、「しや、何泣くぞ、と拳を固め」したたかに寂心の面を打つた。寂心は涙を收めたが、増賀が再び講じ出すと、また泣く。増賀がまた打つ。これが三度に及んで、増賀は遂に寂心の「誠意誠心」に感じ、己が「淵底を盡して止觀の奥秘」を傳へたといふ。

「晩年の露伴」に下村亮一が書いてある通り、「連環記」は「讀んで字の如く、環の連なる如く、人間の相關する世界におこる、さまざまの姿を、ある時は學問の極限に、宗教の極限に、男女の極限に、實に豊富な歴史的實證を示しながら生き生きと活寫した、恐るべき作品」であつて、今回は全體の四半分程の梗概を示したに過ぎないが、「連環記」と並び稱せられる露伴の傑作「運命」にも、「玉環相連なるが如」き寂心と増賀の「誠意誠心」を髮髻たらしめる人物が登場する。明の建文帝の賢臣方孝孺は「天に合して人に合せず、道に同じうして時に同じうせず」の信念に生き非業の最期を遂げるのだが、露伴は方孝孺を評して、「眞に心胸の深處よりして道を體し徳を成すの人たらんことを願

へるの人」であつたと書いてある。

處で、下村によれば、露伴は「連環記」執筆の頃、日本の所謂高僧は「大抵生臭坊主か糞坊主で、時には今の醫者にあるやうな算術坊主」でしかなく、眞に高僧の名に價するのは一人か二人だと語氣激しく語つたといふ。「連環記」にも、「藝術の世界でも、宗教の世界でも、學問の世界でも、人生戰鬥の世界でも、百人が九十九人、千人が九百九十九人」は「額を破り胸を傷つけるのを憚らずに敢て突進する勇氣を缺くもの」で、それが「世のならひ」だとあるが、近代日本の「世のならひ」に「同じうせず」して生を全うした露伴が七十五歳で物した最後の小説、それが「連環記」であつた。

(露伴全集第六卷、岩波書店)